

小学校外国語科における児童の「書くこと」への意欲を高める指導法

研究機関 鳴門教育大学大学院学校教育研究科 指導教官 畑江 美佳
大豊町立おおとよ小学校 教諭 沼 久美子

1 はじめに

新学習指導要領（文部科学省、2018）を受け、2020年度より高学年において「読むこと」、「書くこと」を加えた教科としての外国語科が実施される。中学校段階で音声から文字への円滑な接続がなされていないことや、英語の発音と綴りの関係や文構造の学習に課題が見られることから、5領域の言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することとなった（文部科学省、2018）。そこで、小学校における外国語科では、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことが求められている。

沖原（1985）は、ライティングの役割として、「書くことによって学習したことの確認をさせ、理解や定着を一層確実にする」（p. 19）ことを挙げ、書く活動は他の技能の育成に資する“service activity”としての価値を持つと述べた。また石原（2017）は、小学校で「書くこと」の活動を導入することが中学校での学習に好影響を与えると分析する。一方、田中（2016）は、小学校における「文字指導」について、「文字指導に対する捉え方が教員により異なり統一の見解がない」（p. 174）ことや「文字指導に対して小学校教員の自信の欠如が見られた」（p. 175）という課題を指摘する。

つまり、小学校段階において「書く」活動を行うことは、他の4領域の技能の育成や中学校での学習に好影響を及ぼすことが期待される。しかし、小学校高学年の発達段階に合った「書くこと」の指導方法が明確になっていないという課題がある。そこで、本研究では第2言語習得における「書くこと」の発達に関する知見を活かし、また新学習指導要領より小学校外国語教育で求められている「書くこと」の内容を明らかにすることで、高学年児童の発達段階に応じ、児童が意欲的に取り組むことができる「書くこと」の指導の方法を明らかにしたいと考えた。

2 研究の目的

本研究では「書くこと」の指導において、短時間学習を活用したアルファベット指導と、必然性のある単元ゴールに向けて段階的に自分の思いを表現する授業実践を行うことで、小学校での英語教育における「書くこと」への意欲を高める指導法の在り方について検討する。

3 研究内容

(1) 先行研究の概観

ア 第2言語習得におけるライティング能力

小寺・吉田（2005, p. 56）は、英語の4技能は相関するものであり、その中でライティング能力というものは、リスニング・スピーキング及びリーディングの3つの能力が集約されて表れる、やや高度なものであると述べる。またライティング活動は、リスニング・スピーキング・リーディングという過程によって得たものを、整理・確認し、英語運用をより確実なものとするために欠かせないものであるとし、4技能の調和のとれた育成の必要性を指摘する。

また、アレン玉井（2010, pp.126-133）は、日常的に英語に触れる機会の少ない日本人学習者の音声言語は発達しておらず、語彙も非常に少ないが、ライティングには語彙や文法への深い理

解力が要求されるため、習得には時間がかかると述べている。そのため、初期段階ではアルファベットの学習を徹底し、音韻（素）認識能力を高める活動を行うことが必要である。そして、リーディングとライティングは連動して発達するため、書く活動と同時に読む活動も行いながら、文字と音を関連させる指導が求められる。

以上のことから、第2言語である英語での「書く」活動には、アルファベットの習得と音韻（素）認識能力の発達が前提となる。つまり「書く」活動を行うためには、まずアルファベットを正しく書くための指導法を工夫しなければならない。そして音声言語の発達を促す取組を行うとともに、読む活動にも同時に取り組みながら文字と音を関連させる指導が求められる。

イ 学習指導要領における「書くこと」の指導

新学習指導要領（文部科学省，2018）では、外国語科の目標は、「外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語の違いに気づき、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身につける」（p.69）とされている。外国語教育の課題に対応するために、英語の文字や単語への認識、語順の違い等の文構造への気づき等、言葉への理解を促すには、文字を導入した指導が必要である。

また「書くこと」の目標には、「ア 大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。」と、「イ 自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。」（文部科学省，2018， pp.110-111）という2点が挙げられている。目標アは、大文字・小文字を正しく書くこと、そして語句や表現を書き写すことである。ただし語句や表現を書き写すことについては、「十分に音声で慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現」について、細かな段階を踏んで指導することが強調されており、「書くこと」への順序性を踏まえた指導が求められている。そして目標イは、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能として、英語で書かれた文や文章の中の一部の語、あるいは一文を、児童自身が表現したい内容に置き換えて書くことである。その際には、「例の中から言葉を選んで」書くことが前提となる。

さらに、文部科学省の示す『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』（2017， pp. 82-83）においては、段階的な指導の必要性とともに、目的意識をもって「書くこと」の活動に取り組むことの必要性が示されている。外国語科においてコミュニケーション活動を基盤とする中で、文字に対する興味・関心を高めながら、目的意識を持ち、段階的にアルファベットなどの文字や単語を読んだり書いたりする指導方法の開発が求められている。

従って小学校における外国語科では、①大文字・小文字を4線上に正しく書く力、②簡単な語句を書き写す力、③基本的な表現を書き写す力、④例文を参考に、文の一部を別の語に置き換えて自分の考えを書き表す力の4つを育成することが求められている。アルファベットの習得では、字形の弁別の特徴や、文字と音の関係を理解する等、アルファベットに十分慣れ親しむことが重要である。また語句や表現の書き写し、例文を参考に自分の考えを書く力をつけるためには、目的意識を持ち、段階的に「書くこと」に慣れ親しむ単元構成を工夫することが求められている。段階的な指導の中で、英語の文字や単語への認識、語順の違い等の文構造への気づき等の言葉の仕組みへの理解を促すことで、「書くこと」への意欲を高めることができると考えられる。

(2) 調査

ア 調査目的

本研究では、短時間学習を活用したアルファベット指導及び段階的に「書くこと」に取り組む単元構成を組み合わせることで、小学校高学年の外国語科において、児童の「書くこと」に対する意欲を高める指導法について検討する。

イ 調査対象と調査期間

調査対象：高知県大豊町立おおとよ小学校の第5学年12名、及び第6学年7名

調査期間：2019年4月～10月 外国語科授業に対する事前・事後の意識調査、短時間学習におけるアルファベット指導及び授業実践、「書くこと」の指導への児童の意識調査

ウ 調査内容と調査方法

(ア) 「書くこと」の指導への教員の意識調査

学級担任7名を対象とし、予備調査を実施した(表1)。その結果、児童が最も負担に感じていると思われる領域は、「書く領域(約85.7%)」とする回答が最も多く、また指導者にとって、特に負担の大きい領域として、「書く領域(約28.6%)」が2番目に挙げられたことから、教員、児童共に「書く」活動を負担に感じていると思われる。その理由として、「個人差への対応」や「英語に苦手意識を持たせないようにすること」等、指導法に関する不安が見られた。

また「小学校修了時まで必要だと考える文字指導」として、「基本的な文を書き写すこと」や「例となる文の一部を別の語に置き換えて書くこと」は必要ないと捉えている教員が多く、新学習指導要領で求められている「書くこと」の内容に関して、適切な理解が図られていないのではないかとと思われる。

以上のことから、「書くこと」の指導法を検討するに当たっては、新学習指導要領に求められている「書くこと」の各学年のゴールを明確化し、それを元にスモールステップでの単元構成を考えることが必要である。

表1 「書くこと」の指導への教員の意識調査

番号	質問項目
1	教科化に当たり、最も負担に感じている点
2	外国語科において、児童が最も興味を持っていると思われる領域
3	外国語科において、児童が最も負担に感じていると思われる領域
4	指導者にとって、特に負担の大きい領域
5	小学校修了時まで必要だと考える文字指導
6	書くことの指導に当たり不安を感じている点

(イ) 短時間学習でのアルファベット指導

外国語科におけるアルファベット指導では、①大文字及び小文字の弁別的特徴(字形)の理解、②文字と名前の対応への理解、③文字に音があることへの気づきという3つの段階がある。

そこで、アルファベットにスモールステップで慣れ親しむことができるよう、10分間の短時間学習を活用したアルファベット指導を計10回実施した(表2)。

表2 短時間学習の指導計画

	活動の概要
事前	アルファベットクイズ、事前アンケート
1	大文字・小文字を比較し、仲間分けをする。
2	
3	大文字→小文字の変化の過程を考える。
4	
5	大文字・小文字をマッチングする。
6	アルファベットを書く。
7	「名前読み」と「音読み」を知る。
8	アルファベットとイラストをマッチングする。
9	単語とイラストをマッチングする。
10	初頭音を書く。

(ウ) 段階的に「書くこと」に取り組む単元構成

小学校外国語科における系統的な「書くこと」の指導には、各学年のゴールを明確にすることが必要である。そこで本研究では、5学年では「②簡単な語句を書き写す」、第6学年は「④

自分の考えや気持ちを表現するために、例となる文の一部を別の語に置き換えて書く」をゴールとし、スモールステップでの単元構成で、書くことの授業実践に取り組んだ。

a 第5学年での授業実践

(Unit 3 What do you have on Monday?)

本単元では、教科に関する語彙を学ぶ。そこで「6年生に、ドリーム・スケジュールを紹介しよう」という単元ゴールを設定し、4技能を関連させた単元を計画した(表3)。

まず音声で教科名に慣れ親しむ活動を行った後、①初頭音を書き写す、②語句をなぞり書きする、③語句を書き写すという、スモールステップでの「書く」活動を実施した。

更に、アルファベットへの慣れ親しみが薄いと考えられる5年生では、帯学習として5分間のアルファベット指導を取り入れた。ボトムアップ的アプローチであるアルファベット指導を、単元の言語活動と並行して行うことにより、児童はよりスムーズに「書くこと」へ取り組むことができるようになると思われる。

b 第6学年での授業実践

(Unit 3 He is famous. She is great.)

本単元は、既習の語彙を活用しながら、第3者を紹介する単元である。そこで、「中学校の先生を5年生に紹介する Who am I?クイズを作ろう!」という単元ゴールに向け、4技能を関連させた単元を計画した(表4)。

まず音声での慣れ親しみを深める際には、児童が言語活動で使用すると予想される語彙を、既習語彙を中心に精選し、表現語彙となる文字をより効果的にinputすることをめざした。またワークシートの主語、動詞、目的語、ピリオド等を異なる色で囲み、語順を意識させた。後にカードを並べ替えて文を作る際にも、色分けを手がかりとして、スムーズに文を作るための手立てとした。さらに、語と語の区切りにスペースを置く等、「書くこと」のルールを明示的に伝え、自分が書いた文を確認する時間を設けた。

「自分の考えや気持ちを表現するために、例となる文の一部を別の語に置き換えて書く」というゴールに向けて、①初頭音のみを書き写す、②単語全体を書き写す、③文中の一部の単語だけを書き写す、④文全体を書き写す、⑤カードを見ながら、自分で考えた文を文字として書く活動へとスモールステップでの指導を行った。その際には、ただ機械的に書き写すのではなく、書いた文を音声として教員に伝えることにより、「意味(絵)」と「音」、そして「文字」を関連させた活動を意識して指導した。

さらに、帯活動として電子辞書を用いた Pictionary に取り組み、興味を持った語彙に自由に触れることができるようにし、文字と音を関連させて学ぶことができるようにした。

エ 調査結果と考察

(ア) 第5学年

a 外国語科授業に対する児童の意識の変容

Wilcoxon の符号付順位検定による分析の結果、「英語で友だちや先生の意見を聞くのが楽しい」($Z(11) = -2.460, p < .05, r = -.71$)、「英語の絵本を読んでもらうのが楽しい」($Z(11) = -2.236, p < .05, r = -.65$) は、5%水準で有意差が確認され、事後が事前を

表3 第5学年 Unit3 指導計画

活動の概要	
1	教科名(音声)に慣れ親しむ。
2	教科名を読む。
3	初頭音を書き写す。
4	将来の夢を伝え合う。
5	(教科名を読む。)
6	教科名のなぞり書きをする。
7	教科名を書き写す。

表4 第6学年 Unit3 指導計画

活動の概要	
1	自分自身について伝え合う。
2	語句を読む。
3	初頭音を書き写す。
4	語句を書き写す。
5	中学校の先生にインタビューする。
6	カードを並べ替え、文を作る。
7	文を書き写す。
8	カードを並べて文を作り、書き写す。

上回った（表5）。

表5 事前・事後の外国語科授業に対する Wilcoxon の符号付順位検定による結果 (N=12)

質問項目	事前		事後		検定統計 量 z 値	有意確率 p 値	効果量 r
	Mean	S.D.	Mean	S.D.			
外国語の授業が好き。	3.42	.79	3.75	.45	-1.414	.157	-.41
英語で友だちや先生と会話するのが楽しい。	3.00	.95	3.58	.52	-1.732	.083	-.50
外国のことについて学ぶのが楽しい。	3.42	.90	3.75	.45	-1.414	.157	-.41
日本語と英語の違いが分かるのが楽しい。	3.33	.89	3.58	.52	-1.342	.180	-.39
英語で自分のことや意見を発表するのが楽しい。	2.92	1.08	3.58	.52	-1.809	.070	-.52
英語で友だちや先生の意見を聞くのが楽しい。	2.83	.94	3.58	.52	-2.460	.014*	-.71
英語の絵本を読んでもらうのが楽しい。	3.25	.62	3.67	.49	-2.236	.025*	-.65
英語の文字や単語を自分で読むのが楽しい。	3.00	.74	3.25	.62	-1.342	.180	-.39
英語の文字や単語を書くのが楽しい。	2.83	.72	3.33	.65	-1.613	.107	-.47

** $p < .01$ * $p < .05$

実践を通して「聞くこと」に対する意欲が向上したと考えられる。しかし、本研究の課題であった「英語の文字や単語を書くのが楽しい」は有意差が見られず、「書くこと」への児童の意識にあまり変化がなかった。「書く活動」に対しては、1単元の実践のみでなく、年間を通じて継続して取り組むことが必要であると思われる。

さらに、外国語の授業が好きである理由として、事前では「ゲームが楽しい」という意見が多かったのに対し、事後では「英語を書くこと、聞くことがとても楽しい」等という意見が見られた。「書くこと」の活動を音声と関連させることで、「聞くこと」への意識の向上にも貢献する可能性が示された。

次に、「書くこと」への児童の意欲について、個々の児童の意欲の変容についてまとめた（図1）。事前と事後で意欲が向上した児童6名（50%）いる一方で、意欲が低下した児童2名（約17%）であった。意欲が低下した児童は、自由記述においても、「ローマ字が苦手」等、アル

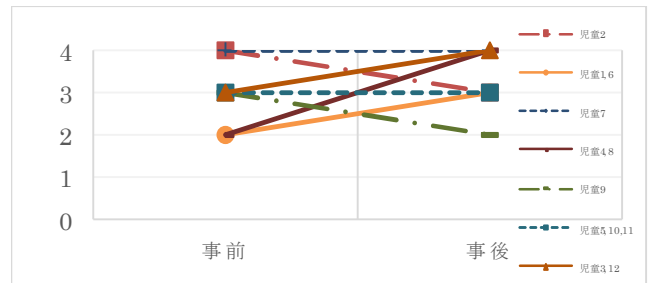


図1 「書くこと」に対する個々の児童の意識の変容（第5学年）

フ
さ

ファベットへの慣れ親しみの不足を感じ

せる記述が見られた。第5学年での「書くこと」においては、アルファベット指導のようなボトムアップ的内容を継続して取り入れることが必要であると考えられる。

b 自由記述より

授業実践後に行った自由記述を KJ 法で分析すると、アルファベットやなぞり書き、書き写す活動といった「書くこと」への達成感が読み取れる。事前調査では、ゲームに楽しさを感じている児童が多かったが、事後アンケートでは、「新しい学び」や「英語を書くこと」といった英語を学ぶことに楽しさを感じている様子も見られる。

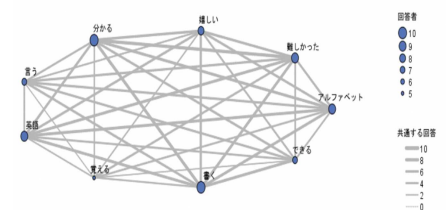


図2 自由記述の分析（5年）

外国語科の授業実践に関する自由記述について、テキストマイニングを用いて関連性を検証するため、5回以上の出現頻度がある用語をカテゴリー化した（図2）。「書く」ことは「分かる」等の達成感を示す言葉と関連している。一方で、「書く」ことや「アルファベット」は「難しかった」という語とも関連している。これは、KJ法での分析における「アルファベット（特に小文字）の困難さ」と共通すると思われる。

(イ) 第6学年

表6 事前・事後の外国語科授業に対する Wilcoxon の符号付順位検定による結果 (N=7)

質問項目	事前		事後		検定統計量 z 値	有意確率 p 値	効果量 r
	Mean	S.D.	Mean	S.D.			
外国語の授業が好き。	3.43	.54	3.43	.54	0	1	0
英語で友だちや先生と会話をするのが楽しい。	3.29	.49	3.43	.54	1	.317	.38
外国のことについて学ぶのが楽しい。	3.86	.38	3.71	.49	-1	.317	-.38
日本語と英語の違いが分かるのが楽しい。	3.86	.38	3.86	.38	0	1	0
英語で自分のことや意見を発表するのが楽しい。	3.29	.49	3.29	.49	0	1	0
英語で友だちや先生の意見を聞くのが楽しい。	3.71	.49	3.86	.38	1	.317	.38
英語の絵本を読んでもらうのが楽しい。	3.57	.54	3.57	.54	0	1	0
英語の文字や単語を自分で読むのが楽しい。	3.57	.54	3.71	.49	1	.317	.38
英語の文字や単語を書くのが楽しい。	3.57	.54	4.00	.00	1.732	.083	.66

** $p < .01$ * $p < .05$

a 外国語科授業に対する児童の意識の変容

Wilcoxon の符号付順位検定による分析の結果、全ての項目で、事前と事後の有意差は見られなかった（表6）。しかし「英語の文字や単語を書くのが楽しい」($Z(6) = 1.732$, $p < .10$, $r = -.66$) は有意傾向であった。また、「英語の文字や単語を書くのが楽しい」に対する意欲の変化について、事後調査において

は全ての児童が本項目に対し「4（楽しい）」と回答していることから、「書くこと」に対するスモールステップでの指導の効果は感じられるが、天井効果ではないかと思われる。

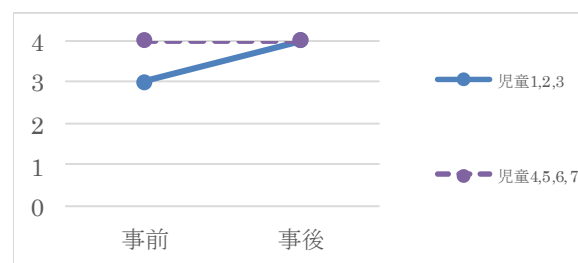


図3 「書くこと」に対する個々の児童の意識の変容（第6学年）

b 自由記述より

自由記述を KJ 法により分析すると、日本語と英語の表記の違いに関する気付きが多く見られた。このことから、「書くこと」に関するスモールステップでの指導は、新学習指導要領（文部科学省，2018，p. 69）に記されている「外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き」を生むために効果的であると考えられる。また、アルファベットの「音」に対する理解に関する記述も見られた。「書く」活動では、文字だけでなく音にも意識を向けさせる指導を行うことで、「聞く」意識へと肯定的な影響を及ぼすことも分かった。

さらに、外国語科の授業実践に関する自由記述について、テキストマイニングを用いて関

連性を検証するため、4回以上の出現頻度がある用語をカテゴリー化した(図4)。「アルファベット」と「音」は、達成感を示す「できる」という言葉と結びれており、アルファベット「音」への理解が深まったことが推測される。中学年の外国語活動から慣れ親しんできた「名前読み」のみでなく、「音読み」も扱ったことで、アルファベットの「音」に関する新たな発見があったことが要因として考えられる。

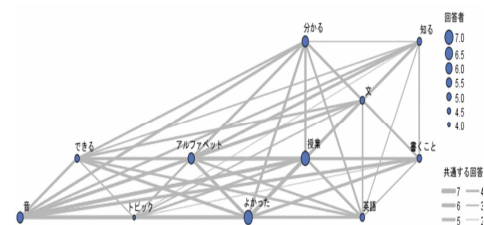


図4 自由記述の分析(6年)

そして「文」と「書くこと」は、「分かる」と言う言葉と関連している。「書く」活動を行ったことで、英文の表記についての理解が深まったからではないかと推測される。

4 まとめ

本研究では、短時間学習を活用したアルファベット指導及び段階的に「書くこと」に取り組む単元構成により、小学校高学年の外国語科において、児童の「書くこと」に対する意欲を高める指導法について検討した。その結果より、「高学年」として一つの枠で示されているものの、「書くこと」に対する意識には、学年間で差があることが推察された。事前のインタビューより、第6学年が「書く活動」に高い意欲を示す一方で、第5学年の児童はゲームや歌に楽しさを感じており、「書くこと」への不安を抱えている児童がいることも明らかになった。よって「書くこと」の指導においては、「高学年」という共通の枠で示される4つの段階から、各学年でめざすべき姿を検討することが必要である。

また実践を通じて、「英語の文字や単語を書くのが楽しい」という項目に事前と事後で有意差は見られなかったが、両学年の「聞くこと」への意識に向上が見られた。短時間学習の中で、アルファベットの「名前読み」のみでなく「音読み」への気づきを促したことや、初頭音に意識を向けたことで、文字の音に関する気づきを得られたのではないと思われる。音声から文字への接続のために、「書くこと」の活動を取り入れることが効果的であることが示唆された。

今後の課題として、本研究は極めて少数での事例研究であり、より効果的かつ信頼性のある示唆が得られるよう、今後は更に大きな規模での実践も視野に入れ調査を行うことが必要である。また本実践を通して、「文字や単語を書くとき」が「あまり楽しくない」と回答した児童の中には、「書く」という活動を行うことに対して配慮が必要であった児童も含まれていた。今後は、学級全体に向けてのステップでの指導のみでなく、学習に際し配慮が必要な児童に対する支援の方法を検討することが必要である。

〔引用文献〕

アレン玉井光江(2010)『小学校英語の教育法—理論と実践—』:大修館書店
 アレン玉井光江(2019)『小学校英語の文字指導—リタラシー指導の理論と実践—』:東京書籍
 畑江美佳・段本みのり(2017)「小学校におけるアルファベット指導の再考:文字認知を高めるデジタル教材の開発と実践」, JES journal 第17号, pp20-35
 小寺茂明・吉田晴世(2005)『英語教育の基礎知識—教科教育法の理論と実践—』:大修館書店
 文部科学省(2017)『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm
 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』:開隆堂
 沖原勝昭(1985)『英語教育学モノグラフ・シリーズ 英語のライティング』:大修館書店
 田中真紀子(2017)『小学生に英語の読み書きをどう教えたらよいか』:研究社